

— 第2日 9月20日(土) 10:00~12:00 —

## S07 意識研究の諸相

N2

企画者	北海道大学	菱谷晋介
企画者	東北大学	行場次朗
司会者	東北大学	行場次朗
司会者	北海道大学	菱谷晋介
話題提供者	東北大学	行場次朗
話題提供者	北海道大学	菱谷晋介
話題提供者	東北大学	岩崎祥一
話題提供者	神戸親和女子大学	多鹿秀継
指定討論者	関西福祉科学大学	八田武志

## 概 要

「意識」は、科学的心理学の黎明期には主たる研究対象の1つであったが、直接的な観察が不可能であることなどから、一時期その研究は忌避されていた。しかしながら、Psychologyが「心」の学問を標榜する限り、いつまでも研究対象から除外し続けられるはずもなく、特に近年は、研究方法論の発展や様々な知見の蓄積に伴って、「意識」への再アタックが果敢に試みられている。そこで本シンポジウムでは、このような状況を踏まえ、下記のような4つの研究領域で「意識」もしくは「意識体験」がどのように捉えられ、また理解されつつあるかという話題を提供していただき、意識研究への理解を深めたい。

## 感性研究と意識（行場次朗）

私たちがいろいろなタイプの絵画を鑑賞するとき、どのような意識がはたらき、感性が喚起されているのであろうか。今回の話題提供では、感覚質の意識をクオリア、対象や事象に対する意識をアウェアネスと定義し、それらの強弱や、主体からのアクセス可能・不可能性を取り上げて、絵画作品を分類する試みを紹介する。そしてクオリアとアウェアネスの強度次元から構成される空間内でのポジショニングの可動性から、創作者ならびに鑑賞者の感性の多様性を解釈する試みを行う。

## イメージ研究と意識（菱谷晋介）

近年、イメージ研究では方法論の発展が著しく、PETやfMRIなどの脳イメージング法を用いた研究や、ワーキングメモリのモデルに基づいた研究から、多くの興味深い知見が得られている。中でも、これまでは取り扱いが難しかった、「主観的な意識体験」というイメージの側面に関する研究に、格段の進展が見られるようになってきた。本シンポジウムでは、これら新しい方法論に基づいて行われてきた最近の視覚イメージ研究について紹介しつつ、「意識体験」生成のメカニズムについて論じたい。

## 注意研究と意識（岩崎祥一）

本シンポジウムでは、選択的注意および注意集中という、2つの独立した注意のメカニズムについて論じたい。選択的注意は、下位側頭葉の処理をboostする。一方、注意集中はfilteringとかattenuationとか呼ばれる機能を果たす。これは、下位側頭葉の処理を直接抑制するというよりも、注意をbottom-upに制御する信号を発している側頭葉と頭頂葉の接合部を、注意集中に伴って抑制することによる。現象学的な観察からすると、前者の選択的注意は意識にはほとんど影響しないが、後者の注意集中に伴う抑制は外界の刺激が意識化することを妨げる。

## 記憶研究と意識（多鹿秀継）

記憶過程を主に実験的に解明しようとするこれまでの研究は、想起意識を前提とした研究であったといっ  
てよい。ところが、長期記憶にエピソード記憶、意味記憶、あるいは手続き記憶といった区分が導入され、かつ多様な実験参加者の記憶実験データや検索意識の有無を操作した研究のデータ等が豊富に蓄積されることにより、記憶における意識研究の意味が浮き彫りにされることとなった。本シンポジウムでは、記憶と意識・無意識の関連性を掘り下げた実験研究を示し、記憶研究と意識の問題を吟味する。